

研究ノート

教育支援ツールとしてのリフレクション・カード

田 中 誠

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

Reflection Cards as an Educational Support Tool

Makoto TANAKA

(Dept. of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University)

Abstract

This paper explores the outline of a learning support system by means of reflection cards, which have been introduced as one of the educational support tools since the 2012 school year at Nagasaki International University, and the corresponding action research conducted by the author.

The four main aims of the reflection cards are as follows:

- (1) To enrich educational support by making the attendance management of larger-size classes easier.
- (2) To offer more appropriate classes by checking students' level of understanding every week. Teachers can thus make corrections to their teaching methods based on feedback on a per-lesson basis in addition to the course evaluations at the end of each semester.
- (3) To make use of it for assisting learners by grasping their learning situation outside the classroom.
- (4) To enhance educational effects by giving feedback on comments from the students in the next class.

Concerning (1), it turned out to be very easy and time-saving, for it takes only about 10 minutes to do the whole data processing, including scanning and making the results changed into the excel data.

As for (2), (3) and (4), action research was done in the course of "Preparation for TOEIC B" and it turned out that the use of the reflection cards, for the most part, has the positive effects for the students.

Key words

reflection, improvement in quality of education, tool for educational support, attendance management

要 旨

平成24 (2012) 年度から長崎国際大学で教育支援ツールの一つとして導入されたリフレクション・カードを活用した学修支援システムについての概要とその効果を確認するために筆者が行ったアクション・リサーチについて報告する。リフレクション・カードを導入した主な目的は4つある。①大規模クラスの出席管理をもっと簡単にすることで、授業支援を充実させたい。②本学では、半期に一度、教育の質を向上させるために授業アンケートを実施しているが、それ以外にも毎回の授業の理解度をチェックすることで、教授方法などに修正を加えながらより適切な授業を提供したい。③授業外での学生の学修状況をチェックし、学修指導に活用したい。④学生からの授業に対するコメントを次の授業でフィードバックしたりすることで、教育効果を高めたい。

まず、①については、回収したリフレクション・カードをスキャナーにかけて、エクセル・データに変換する作業まで含めて、全行程が10分程で済んでしまうことから、スキャナーとエクセルの利用で、

非常に楽に短時間で出席管理ができることを立証できた。

②～④に関しては、「TOEIC 対策 B」の授業でのアクション・リサーチを通して、リフレクション・カードの使用は、学生にとって、概ねプラスの効果をもたらしていることを考察する。

キーワード

振り返り、教育の質の向上、教育支援ツール、出席管理

はじめに

教育の質の向上という課題に取り組むため、どの大学も様々な取り組みを行っている。認証評価も第2クールに入り、本学が受審予定の公益財団法人日本高等教育評価機構の「大学評価基準」においても、「基準2. 学修と教授」において「組織的、総合的に教学経営を進める必要」があるとの記述が見られる。また、評価の視点において、「2-2-②教育課程編成方針に沿った教育課程の体系的編成及び教授方法の工夫・開発」、「2-3-①教員と職員の協働並びに TA (Teaching Assistant) 等の活用による学修支援及び教授支援の充実」、「2-6-①教育目的の達成状況の点検・評価方法の工夫・開発」、「2-6-②教育内容・方法及び学習指導等の改善へ向けての評価結果のフィードバック」という記述もある。このように、教育の質を高めるための教授方法の工夫・開発、並びに学修支援及び教授支援の充実の重要性や教育目的の達成状況の評価とフィードバックの重要性は、広く認識されるようになった。これらの重要性に鑑み、筆者の勤務校である長崎国際大学（以下、本学）でも様々な取り組みを実施している。この稿では、学修支援システムの一環として、リフレクション・カードを活用し、教育の質の向上につなげる取り組みを報告する。

1. 教育支援ツールとしてのリフレクション・カード

1.1 リフレクション・カードの内容とその導入の目的

筆者は、本学の自己点検・評価委員会の副委員長（委員長は学長）及び教育向上専門委員会

の委員長として、教育の質の向上のために様々な取り組みをサポートする立場にある。その取り組みの一つとして、平成24（2012）年度から、出席カードと授業の振り返りの機能を備えた図1のようなリフレクション・カードを導入した¹⁾。

学生は、授業開始時に配布されるこのリフレクション・カードに必要事項を記入する。ご覧の通り、学籍番号、氏名、学科、科目名、日付、出席・遅刻、授業の理解度、授業外学習、コメントの記入欄がある。今年度は、本学におけるマークシートの読み取り装置（スキャナー）の普及が不十分であったため、全教員が一斉に使える状況ではなかった。したがって、スキャナーを使える教員は、回収したリフレクション・カードをスキャナーにかけてデータをエクセル・ファイルに保存し、そうでない教員は、これまでの出席カード同様の取り扱いをして、まずは初年度をスタートした。

このリフレクション・カードの導入の主な目的には、以下のようなものが挙げられる。

- ① 大規模クラスの出席管理をもっと簡単にすることで、授業支援を充実させたい。
- ② 本学では、半期に一度、教育の質を向上させるために授業アンケートを実施しているが、それ以外にも毎回の授業の理解度をチェックすることで、教授方法などに修正を加えながらより適切な授業を提供したい。
- ③ 授業外での学生の学修状況をチェックし、学修指導に活用したい。
- ④ 学生からの授業に対するコメントを次の授業でフィードバックしたりすることで、教育効果を高めたい。

まず、ここで①に関して、少し補足をしてお

● 学籍番号(左に縦に記入し、それをマーク)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	1	2	3						E	
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	1	2	3						S	
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

氏名 学科

科目名 日付 月 日

出席 定時 遅刻 時 分 入室

授業の理解度
よく理解できた まあまあ理解できた 全然理解できなかった

授業外学習
(シラバス記載の「予習・復習」等の授業外学習を行いましたか)
学習した 学習しなかった

コメント

図1 リフレクション・カード

きたい。出席管理システムは高価なシステムを導入すれば、もっと簡単にできるということは承知している。現在も様々な可能性を検討中であるが、現時点では、高価なシステムをすぐに導入することは難しいことから、比較的安価なスキャナーを使う出席管理を導入することにした。スキャナーの取り扱いに慣れてもらえれば、他の教育支援にも役に立つことも重要な利点である。

このマークシートの読み取りには「マークシート読取君2」というソフトを使用するが、このソフトが使用できるようになれば、高価な専用読み取り機や専用用紙を必要とせずに、(パソコン) — (プリンター) — (連続スキャナー) の簡単なシステムで、小テストやアンケート実施など様々な場面での教育支援ツールとして利用が可能となる。これからの教育支援ツールの開発の基礎となるソフトという位置づけもあり、

今後、他の教育支援ツールに応用することが可能と考えられる。

1.2 リフレクション・カード使用の流れ

リフレクション・カードについては、今年度導入したばかりということもあり、教員によって、その使用方法は様々であるが、筆者の「TOEIC 対策B」における事例を紹介しておきたい。

- ① 授業開始5分前から、リフレクション・カードを一人一枚ずつ、筆者自身で配布し始める。他の授業と区別がつくように、筆者の授業のリフレクション・カードには、パンチャーで穴が空けてある。このことで、他の授業で配布されたリフレクション・カードと区別ができるようにしている。
- ② 定時に授業を開始する。
- ③ 復習を兼ねて、前回のリフレクション・

カードのコメント欄の記述に関するフィードバックをする。

- ④ 復習後、今日の授業内容へ。授業中盤で、ブレイクも兼ねて、遅刻者の確認をし、遅刻者に対しては、遅刻欄に前もってマークを付けている遅刻者用のリフレクション・カードを配布する。
- ⑤ 授業の残り時間が5分になったら、リフレクション・カードへの記入を指示する。指示内容は以下の通り。「必要事項を全て記入した後、コメント欄に今日の授業で重要だと思う事項を簡単にまとめて下さい。その後に、授業に関するコメントを何でもいいので書いて下さい。特に、難しくてよく分からなかった事項などは書いておいてもらえれば、次の授業で対応します。」
- ⑥ リフレクション・カードを提出して授業を終了する。
- ⑦ リフレクション・カードをスキャナーにかけて、マークシート部分を読み取り、エクセルのデータに変換し、出席・遅刻のチェック、授業の理解度、授業外学習の状況を数値で確認する。
- ⑧ コメント欄を読み、コメントから学生の理解度を確認し、次の復習で取り上げる内容を決める。
- ⑨ 次の復習で取り上げる内容の教材を作成する。

2. 出席管理のサポート

まず、リフレクション・カード導入の4つの目的のうち、出席管理を簡単にするという点に関しては、筆者が使用しているスキャナーは1分間に20枚の処理が可能なので、担当の60人程度のクラスサイズならば、集めたカードをスキャナーにかけて、エクセルのデータに変換するまで含めて、全行程が10分程で済んでしまう。よって、スキャナーとエクセルが使えれば、非常に楽に短時間で出席管理ができることを立証できた。多くの教員がスキャナーを使うことができ

るようになれば、出席管理をより簡便にすることができ、他にも小テストなどへの様々な応用が可能である。今後、それが可能となるような体制整備を行っていきたい。

3. 「TOEIC 対策B」においてアクション・リサーチを実施

教育支援ツールとしてリフレクション・カードを導入したが、出席管理以外の効果を検証するために、以下のようなアクション・リサーチ（以下、AR）を実施した。

3.1 AR のテーマ

4月に新しく導入したリフレクション・カードについて、こちらが意図した効果をあげているのか、その効果はどのようなものかを検証すると共に、教育力を高めるためのARを実施した。

3.2 背景

今回、国際観光学科の専門科目である「TOEIC 対策B」（1年次以降配当科目、週1回前期開講の授業）においてARを行った。まず、この授業は1講時（9：00～10：30）にあることから、多くの遅刻者が出ることが予測された。そのため、遅刻者を減らす工夫が必要であった。また、TOEIC は非常に難易度が高く、英検2級を持っている学生が受験しても半分程度しか得点できない。よって、授業内容は高度なものになるため、毎回の授業の理解度を把握することは非常に重要であり、授業外でも学生にしっかり学ばせる必要があった。また、授業で学んだことを確実に定着させていかなければ、次から次へと出てくる新しい事項に対処できないという事態になる恐れがあった。さらに、受講者数が多い講義形式の授業であることから、通常の英語の授業のように、授業中に学生と密にコミュニケーションをとりながら進める授業形態を実施することは、困難であると予想された。このような状況の中で、これらの問題に対処す

るために、リフレクション・カードを活用することで、教育力を高めることが可能であるのかを明らかにするために、AR を実施することにした。

3.3 仮説

本 AR では、以下の 6 つの仮説を設定した。

仮説 1：遅刻をすると、リフレクション・カードが遅刻者用になるので、遅刻しないで授業に来ようという気持ちがより強まるだろう。

仮説 2：「授業の理解度」を記入することは、教員のためだけでなく、学生にとっても、自ら授業の理解度を振り返るいい機会となるだろう。

仮説 3：「授業外学習」のチェック欄があることで、いっそう授業外学習をしなければならないという気持ちになる学生もいるだろう。

仮説 4：コメント欄は、教師とのコミュニケーションを取るために役に立つだろう。

仮説 5：コメント欄に、その日の授業の重要事項をまとめて書かせれば、記憶の整理に役立つだろう。

仮説 6：リフレクション・カードのコメントに対して、確実に次回の授業で対応すれば、学生はリフレクション・カードの意義をより理解してくれるだろう。

AR の実施に際し、これらの最初に設定した仮説に関しては、授業中に学生の様子を観察したり、履修している学生と授業外で話をしたりする中で、リフレクション・カードに対する意見を求めることで、最後の授業までに仮説の修正が必要かをチェックした。その結果、今回は、仮説を修正することはしなかった。

3.4 アンケート結果

6 つの仮説を検証するために、最後の授業において学生の下承を得て、リフレクション・カードに対するアンケート調査を実施した²⁾。アンケートの有効回答人数は 49 人（日本人 30 人、留学生 19 人）であった。質問項目は以下の通りである。

- ① 属性
- ② 学年
- ③ 性別
- ④ 国籍
- ⑤ 遅刻すると、リフレクション・カードが遅刻者用になるので、遅刻しないで授業に来ようという気持ちがより強まった。
- ⑥ 「授業の理解度」を記入することは、自分で今日の授業の理解度を振り返るいい機会となった。
- ⑦ 「授業外学習」のチェック欄があることで、いっそう授業外学習をしなければならないという気持ちになった。
- ⑧ コメント欄は、教師とのコミュニケーションを取るために役に立った。
- ⑨ コメント欄に、今日の授業の重要事項をまとめて書くことは、記憶の整理に役立った。
- ⑩ 教師からのリフレクション・カードへの返信は、いいアイデアであるので続けて欲しいと思う。
- ⑪ 自由記述（リフレクション・カードの良かった点や改善した方がよい点等を箇条書きで書いて下さい。）

アンケート回答の形式は、①～④に関しては、該当欄にマークをし、⑤～⑩の各項目に対しては 5 段階（5＝当てはまる、4＝どちらかと言えば当てはまる、3＝どちらとも言えない、2＝どちらかと言えば当てはまらない、1＝当てはまらない）で選択しマークするものと、⑪の自由記述である。

まず、⑤～⑩に関する項目に関して、大まか

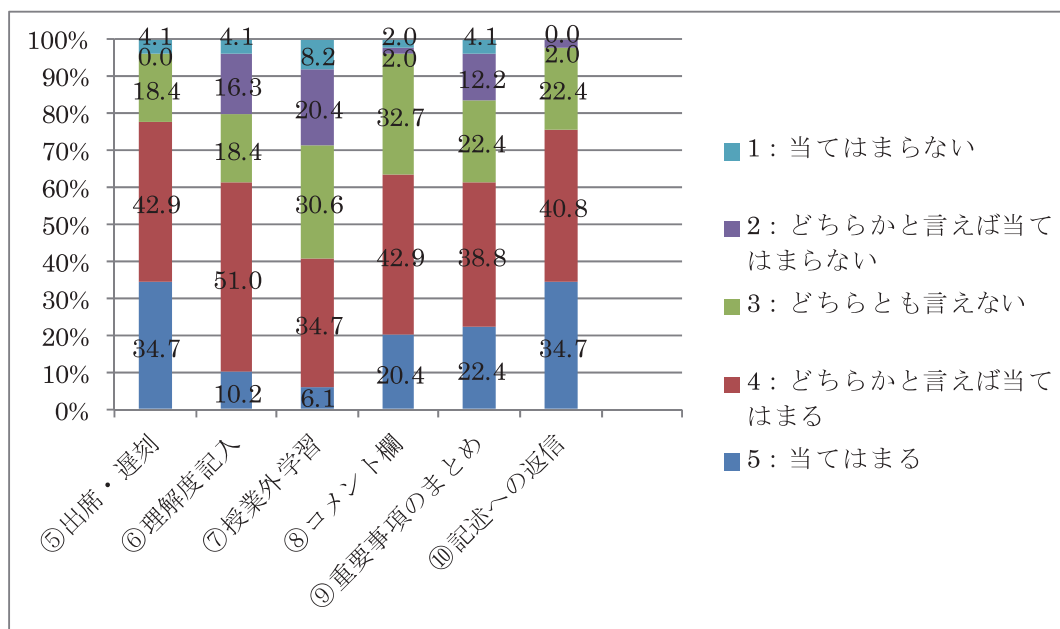


図2 ⑤～⑩に関するアンケート結果

な結果を見てみよう。

図2を見てみると⑦「授業外学習」に関する項目を除けば、「当てはまる」と「どちらかと言えば当てはまる」と答えた学生の割合はどの項目も60%を超えていることが分かる。

以下の表では、もう少し細かく結果を見るために、項目ごとに日本人学生と留学生との間でどれくらい回答数に違いがあるのか数値を提示した。また、5（当てはまる）または4（どちらかと言えば当てはまる）と答えた学生を合わせた数値が、日本人学生と留学生との間で統計的に有意差があるのかどうかを調べるために、イエイツの連続補正をしたカイ二乗検定を行った結果も示しておく。

まず、表1を見てみよう。出席・遅刻に関する項目については、5または4と答えた学生の合計は、38人（77.6%）。また、5または4と答えた日本人学生と留学生の人数に関する検定結果は、 $\chi^2_{(1)}=0.0272$ 、 $p=0.869$ となり、 $p>.05$ で、有意差は認められなかった。

表1 出席・遅刻に関する項目（単位：人、%）

	日本人	留学生	計
1：当てはまらない	2(6.7)	0(0.0)	2(4.1)
2：どちらかと言えば当てはまらない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
3：どちらとも言えない	4(13.3)	5(26.3)	9(18.4)
4：どちらかと言えば当てはまる	15(50.0)	6(31.6)	21(42.9)
5：当てはまる	9(30.0)	8(42.1)	17(34.7)

*（ ）内は構成比。端数処理のため、構成比の計は必ずしも100%にはならない

表2の理解度に関する項目については、5または4と答えた学生の合計は、30人（61.2%）。また、5または4と答えた日本人学生と留学生の人数に関する検定結果は、 $\chi^2_{(1)}=5.4158$ 、 $p=0.01995$ となり、 $p<.05$ で、有意差が認められた。

表3の授業外学習に関する項目について、5または4と答えた学生の合計は、20人（40.8%）。また、5または4と答えた日本人学生と留学生の人数に関する検定結果は、 $\chi^2_{(1)}=2.6813$ 、 p

表2 理解度に関する項目 (単位: 人、%)

	日本人	留学生	計
1: 当てはまらない	2(6.7)	0(0.0)	2(4.1)
2: どちらかと言えば当てはまらない	8(26.7)	0(0.0)	8(16.3)
3: どちらとも言えない	6(20.0)	3(15.8)	9(18.4)
4: どちらかと言えば当てはまる	13(43.3)	12(63.2)	25(51.0)
5: 当てはまる	1(3.3)	4(21.1)	5(10.2)

* () 内は構成比。端数処理のため、構成比の計は必ずしも100%にはならない

表3 授業外学習に関する項目 (単位: 人、%)

	日本人	留学生	計
1: 当てはまらない	4(13.3)	0(0.0)	4(8.2)
2: どちらかと言えば当てはまらない	8(26.7)	2(10.5)	10(20.4)
3: どちらとも言えない	9(30.0)	6(31.6)	15(30.6)
4: どちらかと言えば当てはまる	8(26.7)	9(47.4)	17(34.7)
5: 当てはまる	1(3.3)	2(10.5)	3(6.1)

* () 内は構成比。端数処理のため、構成比の計は必ずしも100%にはならない

=0.1015となり、 $p > .05$ で、有意差は認められなかった。

表4のコメント欄に関する項目について、5または4と答えた学生の合計は、31人(63.3%)。また、5または4と答えた日本人学生と留学生の人数に関する検定結果は、 $\chi^2_{(1)}=0.0$ 、 $p=1.0$ となり、 $p > .05$ で、有意差は認められなかった。

表5の重要事項のまとめに関する項目について、5または4と答えた学生の合計は、30人(61.2%)。また、5または4と答えた日本人学生と留学生の人数に関する検定結果は、 $\chi^2_{(1)}=0.2724$ 、 $p=0.6017$ となり、 $p > .05$ で、有意差は認められなかった。

表6の記述への返信に関する項目について、5または4と答えた学生の合計は、37人(75.5%)。また、5または4と答えた日本人学生と留学生

表4 コメント欄に関する項目 (単位: 人、%)

	日本人	留学生	計
1: 当てはまらない	1(3.3)	0(0.0)	1(2.0)
2: どちらかと言えば当てはまらない	1(3.3)	0(0.0)	1(2.0)
3: どちらとも言えない	9(30.0)	7(36.8)	16(32.7)
4: どちらかと言えば当てはまる	14(46.7)	7(36.8)	21(42.9)
5: 当てはまる	5(16.7)	5(26.3)	10(20.4)

* () 内は構成比。端数処理のため、構成比の計は必ずしも100%にはならない

表5 重要事項のまとめに関する項目 (単位: 人、%)

	日本人	留学生	計
1: 当てはまらない	2(6.7)	0(0.0)	2(4.1)
2: どちらかと言えば当てはまらない	6(20.0)	0(0.0)	6(12.2)
3: どちらとも言えない	5(16.7)	6(31.6)	11(22.4)
4: どちらかと言えば当てはまる	13(43.3)	6(31.6)	19(38.8)
5: 当てはまる	4(13.3)	7(36.8)	11(22.4)

* () 内は構成比。端数処理のため、構成比の計は必ずしも100%にはならない

表6 記述への返信に関する項目 (単位: 人、%)

	日本人	留学生	計
1: 当てはまらない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
2: どちらかと言えば当てはまらない	1(3.3)	0(0.0)	1(2.0)
3: どちらとも言えない	7(23.3)	4(21.1)	11(22.4)
4: どちらかと言えば当てはまる	11(36.7)	9(47.4)	20(40.8)
5: 当てはまる	11(36.7)	6(31.6)	17(34.7)

* () 内は構成比。端数処理のため、構成比の計は必ずしも100%にはならない

の人数に関する検定結果は、 $\chi^2_{(1)}=0.0109$ 、 $p=0.9169$ となり、 $p > .05$ で、有意差は認められなかった。

上記の結果を見る限り、表3の「授業外学習」

に関する項目を除いては、リフレクション・カードの使用は、学生にとって、概ねプラスの効果をもたらしているのではないかということが分かる。また、日本人学生と留学生の間の違いは、「理解度」に関する項目を除いては、統計上の有意差は認められなかった。

4. 考 察

それでは、①の自由記述も参考にしながら、仮説ごとに細かく考察を加えていくことにしよう。

仮説1に対する質問項目の「遅刻すると、リフレクション・カードが遅刻者用になるので、遅刻しないで授業に来ようという気持ちがより強まった」について、全体で77.6%の学生が、5または4と答えているので、遅刻対策としての学生への意識づけという点では、顕著な効果があったと言える。自由記述に、「遅刻が少なくなるのでいいと思う。でも9時ぴったりに来ても配ってあることがあるので、そこは少し厳しすぎると思う。」というコメントがあった。前半部分のコメントを見れば、学生自身も効果を実感していることが分かる。後半のコメントに関しては、授業中に学生に対して、「私の時計は電波時計なので、まず狂いません。私の時計で9時を過ぎれば遅刻です。」と何回も言っているのが、事実誤認であるが、学生にとっては、厳しすぎると感じるのであろう。これは、時間前にきちんと着席をしておくことが当たり前だという認識を全学生にもってもらうように、全学的な取り組みとして、一人一人の教員が地道に努力をしていく必要があると思う。

仮説2に対する質問項目の「『授業の理解度』を記入することは、自分で今日の授業の理解度を振り返るいい機会となった」に関しては、日本人学生と留学生の間で、意見が分かれた。5または4と答えた日本人学生は14人(46.7%)であるが、留学生は16人(84.2%)であった。統計的にも有意差が認められたが、留学生は、TOEIC という英語の問題を日本語で説明を受

けるという言葉の壁もあり、その日の授業がどれくらい理解できたかを振り返ることは、より大きな意味を持つのではないかと推測されたが、ここまでの差が出るとは意外であった。これは、後述の仮説5とも関連してくるが、日本人学生に対して何回も振り返り(省察)の意義に関して話をしたのだが、もっと説明する必要があったのかもしれない。

仮説3に対する質問項目の「『授業外学習』のチェック欄があることで、いっそう授業外学習をしなければならないという気持ちになった」に関しては、日本人学生と留学生の間では、単純に数値を見た場合にはかなりの差があるように見えるが、統計上の有意差は認められなかった。5または4と答えた日本人学生は9人(30.0%)、留学生は11人(57.9%)であったが、この数値が意味することは、考え方によって変わってくる。日本人学生の場合でも、3割の学生がこのチェック欄があることで、授業外学習を意識するのであれば、有意義であると考えられる。また、留学生に関しては6割近くの学生が、授業外学習に意識が向いたことは、この項目が無意味ではなかったとすることができる。

仮説4に対する質問項目の「コメント欄は、教師とのコミュニケーションを取るために役に立った」に関しては、5または4と答えた日本人学生は19人(63.3%)、留学生は12人(63.2%)、全体で31人(63.3%)の学生が5(当てはまる)、または4(どちらかと言えば当てはまる)と答えている。したがって、コメント欄は、ある程度は、教師とのコミュニケーションを取るために役立ったと言える。自由記述には、「コメント欄で自分の意見が書けるのはいいと思う」や「授業で分からなかったことなどをコメント欄などに書けるので、よかったと思う」というような肯定的なコメントが見受けられた。ただし、「リフレクション・カード、コメント欄を記述する時間がもう少しあればと感じた」のような意見もあり、リフレクション・カードに記入させる時間(今年度は5分程度)に関しては、こ

れからも試行錯誤しながら、最適な時間を見極める必要性を感じた。

仮説5に対する質問項目の「コメント欄に、今日の授業の重要事項をまとめて書くことは、記憶の整理に役立った」に関しては、5または4と答えた日本人学生と留学生数に関しては、統計上の有意差は認められなかったものの、1または2と答えた日本人学生（8人）と留学生（0人）に関して、統計的な差があるのかどうかを調べるためにイエイツの連続補正をしたカイ二乗検定を行ってみた。結果は、 $\chi^2_{(1)}=4.2606$ 、 $p=0.03901$ となり、 $p<.05$ で、有意差が認められた。なぜこのような結果になったのかは、日本人学生の自由記述を見てみると理解することができる。3人の学生の自由記述を以下に示した。

学生A：「コメント欄に授業の重要事項をまとめて書くのは意味のないような気がする。というか、みんなまじめにしているだろうか？授業中に同時進行で書いていると思う。授業の終わった後に、まじめに書く人はあまりいないと思う。」

学生B：「リフレクション・カードにまとめとかをカードに書いてしまうとカードが戻ってこないの、見直せず不便でした。出席をとるのにカードでいいと思うけど、コメント欄は各自のノートとかでやりとりして欲しいと思った。（そうすれば自分の質問も残るので）」

学生C：「授業の重要事項を書けと指示されるとそっちはかり気にして、授業に集中できない。感想程度でよいと思う。」

この3人の自由記述を見て、コメント欄に「今日の授業の重要事項をまとめて書く」という作業に対する筆者の指示が、うまく学生に伝

わっていなかったことが分かった。授業外で話をした学生からは、このようなコメントは聞かなかったので、最後のアンケートで気づくことになってしまった。実際、コメント欄に重要事項をまとめて書くという作業に関しては、まじめにしている学生とそうでない学生との差が激しく、ほぼ毎回、その意義の話をしていたが、早くリフレクション・カードを書き終えたいという学生には耳に入っていなかったようだ。

学生A、B、Cの自由記述に関しては、誤解だとしか言いようがない。次の授業からは、誤解の生じないように、もっと指示を徹底する必要がある。また、これらの学生の最大の問題は、授業中にノートを取ることと、リフレクション・カードのコメント欄のまとめを同一視している点である。筆者が意図しているのは、「授業中、学生は各自ノートをしっかりと、その書いたノートを授業の最後に見直して、今日の重要事項のポイントをコメント欄にまとめること」である。つまり、その日の授業の振り返りをするということである。したがって、学生A、B、Cが書いたような内容は、私の指示がきちんと理解されていなかったために生じている。このような学生がいることに気づかず、指示が徹底できなかったことが、仮説5に対する質問項目に対して、1または2と答えた日本人学生が目立つ結果となった要因の一つであろう。

仮説6に対する質問項目の「教師からのリフレクション・カードへの返信は、いいアイデアであるので続けて欲しいと思う」に関しては、全体で、75.5%の学生が5または4と答えているので、リフレクション・カードに対して、確実に返信することは、教育支援として意義があることだと言える。自由記述にも以下のように肯定的な意見が多く見受けられた。

学生D：「先生からのリフレクション・カード返信はすごくいいと思います。」

学生E：「自分が思いつかなかった質問を他の人がして、（それで自分も）分か

ることができたのでよかったです。」

学生 F：「各個人の分からないところを共有できるので、自分の復習とかにもなっていてとても良かった。」

学生 G：「質問をしようにも研究室に行きにくかったので、リフレクション・カードに書いたら、返信が返ってくるので、すごく助かりました。ありがとうございます。」

学生 H：「コメント欄に質問などを書いて、それに返信をしてくださるので、より分かりやすかった。」

学生 I：「授業で分からなかったことなどコメント欄などに書けるので、よかったと思う。」

このように、肯定的にとらえている学生が多いことから、これからも、リフレクション・カードのコメントに対する返信は続けていきたい。特に、大人数の授業で、双方向授業がしにくい授業であっても、リフレクション・カードのコメントに対して返信することで、双方向のコミュニケーションが生まれるので、学生のモチベーションの維持にも役立つと考えられる。今後、クラウドで行うポートフォリオに指導が移行しても、コメントに対して、誠実に対応することの重要性を示していると言える。

5. ま と め

以上、これまで、本学のリフレクション・カードを活用した学修支援による教育の質の向上に関する取り組みについて報告してきた。繰り返しになるが、まとめをしておきたい。このリフレクション・カードの導入の目的には、1.1で述べたように、主に以下のようなものがあげられる。

- ① 大規模クラスの出席管理をもっと簡単にすることで、授業支援を充実させたい。
- ② 本学では、半期に一度、教育の質を向上

させるために授業アンケートを実施しているが、それ以外にも毎回の授業の理解度をチェックすることで、教授方法などに修正を加えながらより適切な授業を提供したい。

- ③ 授業外での学生の学修状況をチェックし、学修指導に活用したい。
- ④ 学生からの授業に対するコメントを次の授業でフィードバックしたりすることで、教育効果を高めたい。

これらの4つの目的のうち、①に関しては、集めたカードをスキャナーにかけて、エクセルのデータに変換するまでを含め、全行程が10分程で済んでしまうことから、スキャナーとエクセルが使えるれば、非常に短時間で楽に出席管理をすることができることが立証できた。

②～④に関しては「TOEIC 対策B」の授業でのARを通して、リフレクション・カードの使用は、学生にとって、概ねプラスの効果をもたらしていることが明らかになった。

この一回目のARでの気づきを次回の授業に活かし、PDCAサイクルで授業改善を行っていくことが重要である。また、この稿を読んでいた先生方には、このARの結果を参考に、それぞれの授業での授業改善に役立てていただければ幸いである。

注

- 1) 当初、このリフレクション・カードでは、学生向けであったので、学生に分かりやすくということもあり、「学習」という表現が使用されているが、現在印刷済みのリフレクション・カードを消費したら、「学修」という表現に切り替えることになっている。この稿では、直接リフレクション・カードの記述を参照する時以外は「学修」という表現を使用している。
- 2) このARのために使用したリフレクション・カードに関するアンケート用紙を以下に示した。

参考文献

金森 強 (2012)「アクション・リサーチ (AR) で取り組む授業改善と Self-study による教師の成

- 長」『月刊 英語教育10月号』大修館書店, 13-15 頁.
- 公益財団法人 日本高等教育評価機構 (2012)「大学 評価基準」2012年4月改訂 http://www.jihee.or.jp/download/04_hyokakijyun.pdf (平成24年8月22日閲覧)
- 佐野正之 (編著) (2005)『はじめてのアクション・リサーチ—英語の授業を改善するために』大修館書店.
- 高橋一幸 (2012)「授業改善はじめての第一歩 自分の授業を reflection しよう!」『月刊 英語教育 10月号』大修館書店, 10-12頁.
- 中央教育審議会 (2008)「学士課程の構築に向けて (答申)」 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf (平成24年8月22日閲覧)

● リフレクション・カードに関するアンケート

目的：リフレクション・カードに対する学生の意見を聞き、今後の活用に資することを目的として行う
属性

- 1 属性 国際観光学科 ☐ その他 ☐
- 2 学年 4年 ☐ 3年 ☐ 2年 ☐ 1年 ☐ その他 ☐
- 3 性別 男性 ☐ 女性 ☐
- 4 国籍 日本 ☐ 日本以外 ☐
- 5 遅刻すると、リフレクション・カードが遅刻者用になるので、遅刻しないで授業に来ようという気持ちがいよいよ強まった。
当てはまる ☐ 5 どちらかと言えば当てはまる ☐ 4 どちらとも言えない ☐ 3 どちらかと言えば当てはまらない ☐ 2 当てはまらない ☐ 1
- 6 「授業の理解度」を記入することは、自分で今日の授業の理解度を振り返るいい機会となった。
当てはまる ☐ 5 どちらかと言えば当てはまる ☐ 4 どちらとも言えない ☐ 3 どちらかと言えば当てはまらない ☐ 2 当てはまらない ☐ 1
- 7 「授業外学習」のチェック欄があることで、いっそう授業外学習をしなければならないという気持ちになった。
当てはまる ☐ 5 どちらかと言えば当てはまる ☐ 4 どちらとも言えない ☐ 3 どちらかと言えば当てはまらない ☐ 2 当てはまらない ☐ 1
- 8 コメント欄は、教師とのコミュニケーションを取るために役に立った。
当てはまる ☐ 5 どちらかと言えば当てはまる ☐ 4 どちらとも言えない ☐ 3 どちらかと言えば当てはまらない ☐ 2 当てはまらない ☐ 1
- 9 コメント欄に、今日の授業の重要事項をまとめて書くことは、記憶の整理に役立った。
当てはまる ☐ 5 どちらかと言えば当てはまる ☐ 4 どちらとも言えない ☐ 3 どちらかと言えば当てはまらない ☐ 2 当てはまらない ☐ 1
- 10 教師からのリフレクション・カードへの返信は、いいアイデアであるので続けて欲しいと思う
当てはまる ☐ 5 どちらかと言えば当てはまる ☐ 4 どちらとも言えない ☐ 3 どちらかと言えば当てはまらない ☐ 2 当てはまらない ☐ 1
- 11 自由記述（リフレクション・カードの良かった点や改善した方がよい点等を箇条書きで書いて下さい。）

図3 リフレクション・カードに関するアンケート用紙